

選抜の諸方式

1 一般入試方式

ここで一般入試方式と呼ぶ選抜方式は、共通1次、2次試験、高校調査書、健康診断の諸結果を総合して、合否判定がなされるものを基本とするが、2段階選抜はその一態様である。受験生側からは好まれないが、受験者倍率の高い学部等ではキメ細かな2次試験を行うためには、これを使わざるを得ない。この場合、共通1次の成績による第1段階選抜で、入学定員の何倍を合格させるかが問題となる。千葉大学は、62年度入試で2次試験の配点比率が高められ、かつ受験機会が複数化される改革に対応して、適正倍率の見直しを行い、従来の4倍を5倍に改める暫定的結論を得た。そのため、一定の分析モデルが考案された。

2 推薦入学方式

60年度に推薦入学を実施した国立大学の学部数は、昼間部・夜間部を通じて、60大学(64%)、116学部(33%)で前年度より4大学18学部増加した。関係の研究は今回も15件の多きに上った。

(1) 成績調査

和歌山大学では経済学部について、入試成績のグループ別比較を試みた。60年度推薦入学試験に不合格で2次試験を受験し

た群と、一般入試受験者群の別に、教科別の相関係数、平均点、標準偏差を調査したところ、例年どおり大差は見られなかった。ただ、60年度推薦入学受験者群は、1次・2次・総合点のすべてで、一般入試受験者群を上回った。このほか入試に関し、推薦入学の2次試験に与えた影響(図書館情報大学)、推薦枠の妥当性の検討(鹿屋体育大学)、選考方法の検討(佐賀医科大学)が見られた。

推薦入学者群と一般入学者群、場合によっては2次募集入学者群をも対照して、入学後の成績を追跡調査した大学がかなりあった(弘前、山梨、富山、静岡、兵庫教育の各大学)。修得単位数、前期課程修了率、留年状況、学業成績については、ほとんどの場合、推薦入学者群が上回るか、他群と差がない結果が報告されている。また、農学部について、推薦入学者の積極的な学習態度や農業関係への就職率の高さが評価されている。宮崎大学は、農学部林学科の推薦入学者を対象に、農業高校出身者と普通高校出身者の単位修得状況、平均得点を比較したが、大差なしとの結果であった。

(2) 調査検討

推薦入学未実施の大学の中にも、各種の調査により導入の可否を検討しているところがある。北海道教育大学は、継続的に検

討しているが今回はとくに推薦基準について研究し、調査書の評定平均値が3.8以上の者に、学習可能性が十分ある者のあることなどを報告した。大阪教育大学は、昨年プロジェクト・チームを設けて、国公立大学の教育学部を対象とする実態調査を実施した。福岡教育大学では、全学的な意見調査を実施した。

3 第2次募集

60年度に定員留保の2次募集を実施した国立大学は、32大学(34%)48学部(14%)で前年度に続いて激増した。受験機会複数化の気運との関連がうかがえる。関係の研究も次の各分野にわたって計11件の多きに上った。

(1) 入試関係

共通1次得点が一般に高いことがしばしば指摘されるが、第1次募集の入学者群の上位3分の1ないし2分の1の範囲に、2次募集入学者は分布すると、次の大学では報じている(弘前大学人文学部経済学科、宇都宮大学工学部2学科・農学部畜産学科、静岡大学理学部3学科、長崎大学水産学部)。しかし、ある化学科では、この傾向が59年度には逆転した。これは、2次募集定員の拡大による1次募集定員の縮小と、全国的に化学系学科の2次募集定員が増大した結果と考えられている。2次募集の弱点は専攻志望の不確実な者の受験にあるが、岩手大学の農学部農業土木学科・工学部2学科の入学者は、第1次募集時に、過半数が関連学部系統を志望し、15・16%が前者

は工学系を後者は農水産系を志望したと報告されている。入学辞退も問題視されるが、経済学部・理工学部の2次募集合格者に入学辞退が顕著に多い事例の報告があった。

(2) 入学後の追跡調査

2次募集入学者は、1次募集入学者に比して共通1次得点が一般に高いが、入学後の成績はどうであろうか。数大学で追跡調査がなされた。静岡大学理学部では、前期課程修了率と学部移行率がより高かった。長崎大学水産学部では、教養課程は大差ないが、専門課程は総得点平均と優評価の取得数において優っていた。こうした長所の反面で、成績の上位者・下位者のバラツキが大きい、中途退学率が顕著に高い、留年者が多いとの弱点の報告もあった。

(3) 入学者の意識調査

旧高商系大学・学部5つの共同実施の一環として、小樽商科大学は1次募集・2次募集の入学者両群合計50名程度の各学年の学生を対象に、広範な意識調査を実施した。この両学生群は、特徴のかなり異なる集団である実態が浮き彫りされて興味深い。例えば、2次募集生が、本学の教育に期待するものは、①社会の動き、人生を深く知る教育、②実学的な教育の順に多く、1次募集生とは逆である。望ましい大学教師像については、第1順位は2次募集生は「学問研究にすぐれている」、1次募集生は「温厚で学生が親しみやすい」と異なり、第2順位は「情熱をもって積極的に接する」で一致した。また、専門課程の講義について、2次募集生は「難しい」とする比率は

より低く、「満足している」比率はより高い。反面、退学希望が2・3学年に目立ち、4年次には減るがなお若干残っていた。

4 特別な入試

今回報告があったのは、帰国子女の特別入試についてのみであった。この特別入試の実施数

は年々増加し、60年度は52学部（15％）に急増した。研究も、評価方法・基準、枠拡大の可否、入学者の追跡調査などが報告された。（東北・横浜国立・岐阜・京都の各大学）。（注、実施大学・学部数等の統計は、文部省大学課調査に基づく。（ ）内は該当の大学・学部総数に対する百分比である。）